大阪府箕面市教育委員会

【総人口】139，883人

【自治体 関連URL】https://www.city.minoh.lg.jp/sinfancy/hoikuyoujikyouiku/kakehasi.html

【主担当部局】箕面市教育委員会保育・幼児教育センター（幼児教育担当）
【主な関係部局】保育幼稚園総務室（公立幼稚園・保育所・認定こども園担当）
保育幼稚園利用室（私立幼稚園・民間保育園担当）
学校教育室（公立小学校担当）

	幼稚園			保育所		幼保連携型地域裁量型		小学校		
	国立	公立	私立	公立	私立	公立	私立	国立	公立	私立
施設数	0	2	5	2	27	1	3	0	14	1
園児・児童数	0	50	364	246	2,244	180	496	0	8,550	347

事業実施地域・協力園校	【実施地域】 萱野小学校区（モデル地域） 【協力園校】 幼：公立認定こども園１園、私立認定こども園　１園、民間保育園　１園 小：公立小学校１校

架け橋期のカリキュラム開発会議	【会議委員人数】 ９名	【開催数】 計11回
	【委員属性】 大学教授１名、公立認定こども園長１名、民間保育園長１名、私立認定こども園長１名、公立小学校長１名、保護者３名、市教育委員会事務局（部長級１名）	

架け橋期のコーディネーター等	【配置人数】 １名 【経歴】 大阪総合保育大学　教授

架け橋期のカリキュラム	【開発主体】 萱野小学校区（小学校1校、認定こども園1園）

大阪府箕面市教育委員会

【事業実施の背景・目的】

- 箕面市では、0歳から18歳までの子ども施策を総合的に展開するため、平成17年に市長部局と教育委員会に分かれていた子ども施策を教育委員会に一元化。幼児教育と小学校教育とが連携し易い体制が確立された。
- 0歳から18歳までの学びの連続性に配慮しながら、幼児教育から小学校教育への「架け橋期」を就学前5歳児から小学校1年生までの期間と捉え、本市の目指す子どもの姿＝「箕面っ子」を育むため、文部科学省「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」をベースに共通の視点を設定し、架け橋期カリキュラムを作成した。

【事業実施体制】

- 本市の中央に位置し、公立小学校と公立認定こども園が隣接する萱野小学校区をモデル地域に設定した。
- 学識経験者、公立・私立の就学前保育・教育施設代表者、小学校校長等で構成される「架け橋期カリキュラム開発検討会議」（以下「開発検討会議」という。）を設置。また、同会議に参加している校園所の職員で構成された「ワーキンググループ」において、開発検討会議の意見をもとに施設見学や意見交換などを行うことで、カリキュラムの作成に繋げた。

【取組内容】

- 開発検討会議で方針を決定し、ワーキンググループでドキュメンテーションワーク等を通して子どもの学びを可視化し、それぞれの教育活動について、相互理解を図った。
- 作成したカリキュラムに各校区の取り組みを追記し、校区版のカリキュラムになるようにした。
- 研修会（合同研修会含む）等を通して、施設種別や運営種別を問わず「架け橋期」への取組の意義や重要性を啓発した。
- 架け橋プログラムの関心・理解を得るため、モデル地域にて保護者向けおたよりの配付を行った。

ドキュメンテーションの様子

ワーキンググループの様子

【課題と解決方法】

- 施設種別によって会議可能な時間帯が異なる⇒モデル校園所の施設見学にて、就学前保育・教育施設の様子を小学校職員が動画視聴し、視聴後に意見交流を実施することにより、効率的な施設見学を行った。
- 全市域への展開⇒各小学校に訪問し、架け橋期カリキュラムの意義と重要性を丁寧に説明を行い、理解を得るとともに、小学校と公民の就学前保育・教育施設との連携が図れるよう施設同士をつなぐための協力を積極的に行った。
- 架け橋の意義の周知⇒幼保小接続にかかる合同研修会を実施し、ワーキンググループの取組を伝えるとともに、公民の就学前保育・幼児教育施設職員と小学校職員が語り合う場を設け、保育・教育の相互理解と学びの連続性についての理解を図った。

【成果】

- モデル地域においては、遊びや学びに向かう姿勢は幼児教育の場でも、学校教育の場でも「安心」できる環境の基で発揮されることや、１年生はゼロからのスタートではないこと（学びの連続性）が意識されたことで、職員の子どもへの言葉がけや指導の方法が変化し、子どもの「安心」を基盤とした学びにつながった。また、相互理解を図ったことで、育ちや学びに見通しをもてるようになり、教材開発やカリキュラム、活動の模索の幅の広がりと見直しにつながった。

【今後の課題】

事業を継続していくためには、校区によって異なる実情を考慮して、校区ごとに継続していくことができる形になるよう進めていく必要がある。

大阪府箕面市教育委員会

1　架け橋期カリキュラムの開発に当たって、幼保小の関係者で大事にした視点

資質・能力（３つの柱）	幼児期の遊びの中で、知識・技能の基礎や思考力の基礎、そして学びに向かう力が一体的に育まれていること、そしてそれが小学校教育へとつながっていることを相互に確認した。
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（１０の姿）	幼児期の遊びの中にどのような「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（１０の姿）」があるかを読み取り、一つの活動にいくつもの姿があること、そしてそれが小学校の学びにつながっていることを確認した。
教科とのつながり	幼児期の遊びが「総合的な学び」であることを実感し、小学校でのさまざまな教科における教育の学びの土台となっていることを理解した。

2　架け橋期カリキュラムが完成するまでの協議内容・プロセス

１年目（令和４年度）　土台づくり　　まずは「語り合い」

「架け橋期における接続の意義」に関する学習会（学識経験者による研修）や、施設見学等を通じて、関係者間の顔合わせ、各施設における取組や子どもたちの実態共有、意見交換などの土台づくりを中心に実施。

２年目（令和５年度）　カリキュラム（素案）の作成　　カリキュラム（素案）の作成・実践・検証

- １年目の取組を継続しながら、幼児期に育まれる資質・能力や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が小学校の各教科等にどのように接続していくのか、検討会議で意見聴取。
- 検討会議での意見を踏まえ「架け橋期カリキュラム（素案）」を作成し、本市のモデル地域である萱野地域（萱野小学校、かやの幼稚園、萱野保育所）で実践・評価。　※令和６年度からかやの幼稚園と萱野保育所はかやのこども園に移行

３年目（令和６年度）　カリキュラムの完成　　地域の実情に合わせたカリキュラムへ

- １・２年目の取組を継続しながら、モデル地域での実践を引き続き行い、評価を反映させた「架け橋期カリキュラム」の完成。
- 完成した「架け橋期カリキュラム」を各就学前保育・教育施設及び小学校へ周知するとともに、市内他地域への持続可能な展開へとつなぐ。

◆「架け橋期カリキュラム」を社会に開かれた教育課程にするため、様々な立場の方で構成される「架け橋期カリキュラム開発検討会議」を設置。

◆ 同会議に参加している校園所の職員で構成された「ワーキンググループ」において開発検討会議の意見を基に、施設見学や意見交換などを行うことで、互いの教育活動やその工夫を知り、幼児期と児童期のつながりを考え、カリキュラムの作成に繋げた。

1年目

- 互いを知るためモデル校園所の見学を行い、幼児教育と小学校教育それぞれの状況を知り、互いの思いや学びの工夫について語り合う場を設けた。
- ワーキンググループでは、小学校の先生に幼児期の学びの芽生え等を伝える手段として、写真を使用したドキュメンテーションワークなどの「見える化」を行い、モデル地域での実践検証を進めた。

2年目

- 架け橋コーディネータの指導・助言を受けながら架け橋期カリキュラム（素案）を作成し、モデル地域での実践検証を進めた。
- 市内就学前保育・教育施設、小学校を対象に架け橋期に係る研修会を開催した。合同研修会では小学校区ごとにグループ分けをし、教職員の交流時間を設けた。
- 市内全ての小学校を訪問し、校区によって実情が違うことや地域交流等の差について確認した。

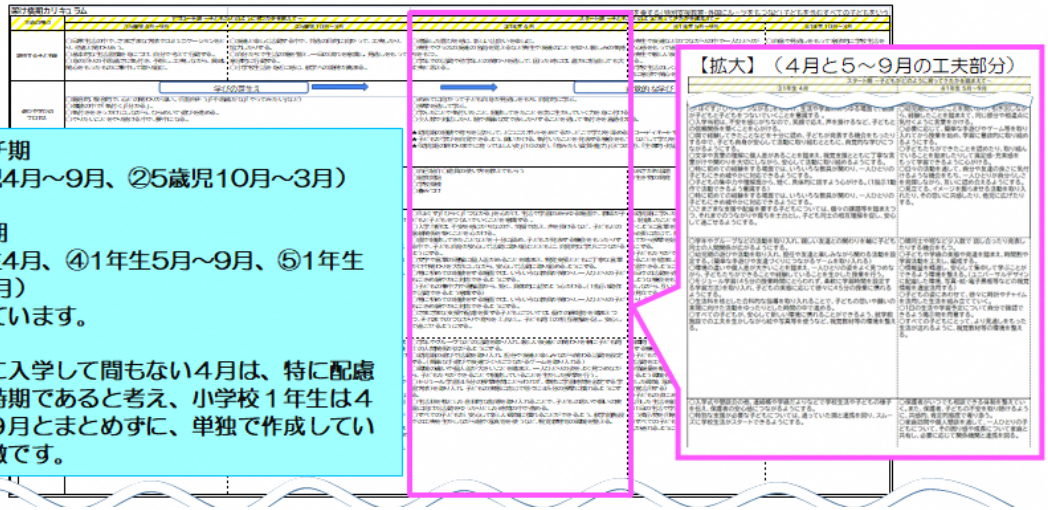
3年目

- 引き続き、ワーキンググループにおいて事例を収集し、モデル地域での実践検証を進めた。
- 市内全ての小学校を訪問し、架け橋期カリキュラムの作成と今後の「接続」に関する取り組み等について説明した。
- ワーキンググループで実践・検証して作成したカリキュラムに、各校区で「地域での取組」「子どもの交流」「教職員の交流」を追記し、地域の実情を考慮した持続可能なカリキュラムを作成した。

大阪府箕面市教育委員会

3　架け橋期カリキュラムの内容・ポイント・活用の仕方

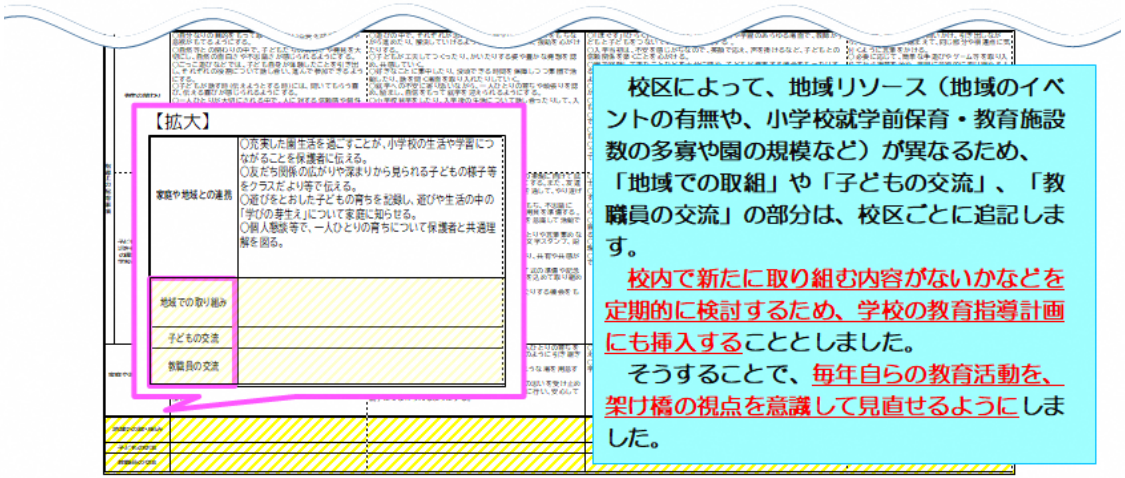
ワーキンググループにおいて共通理解を図り、改めて確認した工夫や配慮をカリキュラムに反映させました。



アプローチ期
（①5歳児4月～9月、②5歳児10月～3月）
と、
スタート期
（③1年生4月、④1年生5月～9月、⑤1年生10月～3月）
で構成しています。

小学校に入学して間もない4月は、特に配慮が必要な時期であると考え、小学校１年生は４月を４～９月とまとめずに、単独で作成しているのが特徴です。

モデル地区で開発したカリキュラムをもとに、校区ごとに自校区の特色を見える化しました。



校区によって、地域リソース（地域のイベントの有無や、小学校就学前保育・教育施設数の多寡や園の規模など）が異なるため、「地域での取組」や「子どもの交流」、「教職員の交流」の部分は、校区ごとに追記します。

校内で新たに取り組む内容がないかなどを定期的に検討するため、学校の教育指導計画にも挿入することとしました。

そうすることで、毎年自らの教育活動を、架け橋の視点を意識して見直せるようにしました。

◆ スタート期の小学校に入学して間もない4月は、特に配慮が必要な時期であると考え、小学校1年生は4月を単独で作成。

◆ 校区によって地域リソースが異なるため、モデル地域で開発したカリキュラムを基に「地域での取組」「子どもの交流」「教職員の交流」は校区ごとに追記するようにした。

◆ 校内で新たに取り組む内容がないかなどを定期的に検討し、毎年学校の教育指導計画と併せて提出することで、継続して活用できるカリキュラムとした。

実践結果を踏まえて見直した点・改善した点

◆ 5歳までに経験してきたことを活かした関わりが大切であることから、「教えてあげなければ」という思いから「知っていることを認めること」を意識する記載に変更した。

◆ 環境を整えるだけではなく配慮が必要であることから、「個人差があることを踏まえ…視覚支援とともに丁寧な心がけや」を追記。様々な園から集まる子どもたちのばらつきに配慮した。

◆ 5月～6月から関係性の視野が広がることから、4月に入れていた「隣同士や班など少人数で話し合ったり」を5月～9月に移動。

◆ 指導上の配慮事項は全ての子どもへの配慮に繋がるため、指導上の配慮事項に「＊子どもとは・・・　様々な支援や配慮を要する（特別支援教育・外国にルーツをもつなど）子どもを含む全ての子どもをいう」を追記

大阪府箕面市教育委員会

4　架け橋期カリキュラムを園校で実践したことによる先生方の指導の工夫や子どもの姿の変化

指導・援助の変化（保育所・幼稚園・認定こども園）

- 架け橋の交流で、小学校の先生に「園での経験が入学後につながっている」と言われることで、自身の保育や教育活動に根拠や自信がもてるようになった。
- 子どもたちが自分で意見を言えるような声かけを心がけている。「何がしたい？」「どうするの？」等、自分ができることをのばす、子どもの力を育てる意識で行っている。
- 子どもたちが自分の気持ちや意見を言うためには、心の安定が必要なので、安心づくりを心がけるようになった。

子どもの学びの変化

- 子どもたちが、今いる場所で「安心」して遊べる（学べる）ようになった。
- 子どもたちへの取り組ませ方が変わったので子どもたちの学びに変化が出ていることがわかる。「どこまでできる？」が見通せるようになり、判断ができるようになった。

箕面市ＰＲキャラクター
滝ノ道ゆずるとモミジーヌ

指導・援助の変化（小学校）

- これまでの経験を聞き取った上で「小学校ではここが変わるよ」と伝えることで、子どもたちは安心して自信をもって行動している。これまでの経験を認めることは、子どもとの信頼関係を築くことにも繋がっている。
- 以前は、「入学当初は知らないから一から教えてあげないと…」という意識で声かけしていたが、「知ってる？」「やったことある？」「どうすればいいかな？」と、子どもたちに問いかける機会が増えた。
- 子どもたちができないと思っていたことが実際にはできるなど、見通しがもてたことで教材開発やカリキュラムを模索する幅が広がった。